

で、その次がバスケットボールであると言われている。

スポーツ賭博で特徴的なのは、勝敗だけではなく、スコアについても問題になってくるということで、つまり、より一層予想ができないというわけである。

0、3、7という数字を決めて、フットボールでいいスコアというふうにしてパスしておいて、トランプを引いて、引いたその番号を前に決めた0、3、7に入れていくのである。そうすると、7が一番良いので皆そこに書き入れてしまうから、トランプで引いて書き入れると言っていた。

つまり、ルーレットみたいなもので、数字のところには第1クォーターとか第3クォーターとか書いてあって、置いたトランプの数字とゲームでゲットされた得点数がそれと一致したら当たるものである。

ところで、スポーツ賭博の禁止を立法化するまでには至らないのは、やはり、スポーツそのものが社会的に認められている行為であるということがある。普通、犯罪が起こると、そこに必ず犠牲者がいるわけだけれども、スポーツ賭博のような非合法ギャンブルには、一般的には犠牲者はいないわけで、まさに「被害者なき犯罪」というわけなのである。

それに対して麻薬の場合には、麻薬の所持や使用そのものが非合法的なわけで、そこで流れる非合法的な金がおよそ460億ドルと推定されているだけで、実際には、最低限でもその倍近い金が動いていることになる。

(6) インターネット・ギャンブル解禁国と非解禁国の関係

アメリカでは、現在インターネット・ギャンブルは、ネバタを除いて全面禁止されている。

そもそも、インターネット・ギャンブルを取り締まる類似の法的根拠としては、ワイヤー・アクト、通信傍受法というものがあり、電話を使って賭けに関して情報を流すこと自体がワイヤー・アクトにひっかかるといわれる。1977年にはアリゾナ州で、インターネット・プロビジョン・アクトという法律が制定され、インターネット・ギャンブルが禁止されたが、どんどん技術が進歩して有線から無線になり、これから光ファイバーになってきた場合はどう対応するのかということが課題になっている。

問題は、田舎等にいと全く楽しみがなく、どうしてもインターネットを通じて簡単にギャンブルでもやろうということになってしまうことである。

FBIでは、インターネット・ギャンブルのマーケットは今後ますます大きくなり、麻薬等よりも大きなマーケットになるということを想定して対応策を立てていく必要性を強調していた。そして、すでに依存症や「のめり込み」状態になってしまった人たちをどうやって治療し、また、そうした依存症等をどうやって予防していくのかについても考える必要がある。なぜなら、今までのカジノであれば、遠くに行ってやるという手間が一つのハードルになっていたが、家の中でも誰でも簡単にやれるインターネット・ギャンブルでは、そういった物理的・時間的・精神的ハードルがなくなってしまうからである。

スポーツ賭博は原則として非合法とされているので、スポーツ賭博をやって捕まったと

いうケースがどんどん出てきており、当然、インターネットでそれが行われるようになった場合、どのように取り締まるべきかについても、今後は大きな問題となるであろう。

さらに、インターネット特有の問題としては、インターネット・ギャンブルはアメリカ国内では禁止されているので、アンティガ等のカリブ諸島の小さな島国等が、インターネット・ギャンブルを合法化したとしても、アメリカからアクセスした場合にアメリカで非合法であれば、たとえ相手国で合法であっても非合法とされるのである。これは、この先、非常に問題になるであろう。なぜなら、カリブ諸島だったら合法なので、謳い文句が「合法なので問題ない」という形でインターネットに広告を出すわけだが、実際は、合法的な国からアクセスしないと駄目ということになり、結局、どこの国の法律を犯しているかということ特定すること自体が、ものすごく難しくなってくるからである。

アメリカの国内では、ネバダ州を経由してアンティガにアクセスした場合には、ネバダ州とアンティガは両方合法だから、合法ということになる。ところが、カリフォルニア州からネバダ州にアクセスしてということになるとインターネットではコントロールできないことになる。

一つの問題は、それでは合法的な所に銀行口座を開いてということがあるかもしれないけれども、結局合法でないところにお金が入ってしまうという段階で、違法になってしまう。そこにマネー・ロンダリングの問題が出てくるわけである。合法のように見せかけて入れた非合法の収益金をどのようにして浄化して自分の方に持ってくるかということである。

結局、色々なギャンブル、例えば、ロトリーにしても規制があり、一日のうちの引く時間と場所が決められていて、あとは曜日、年齢も決められていて規制がされているわけである。購入の際には、身分証明書が必要な州もある。

ところが、インターネットの場合は、24時間アクセスが可能になり、誰でも、何処でも、賭ける額も決められるわけで、コントロールが非常に難しく青少年に対する対策も必要となる。

それに対して、すべてのカジノにはレギュレーションがある。例えば、スロット・マシンだとペイアウト等もきちんと決められているわけで、すべてがチェックされているが、インターネットには、そういったレギュレーション、つまり規制というものを掛けることができないわけである。スロット・マシンで、ジャックポットとって、大金が入ったときは、その場でちゃんと調べるそうで、誰がどの台でとったのか、もちろんサインも調べるし、その場に人がいて、この人がどういう人かということはずべて調べられる。特に、大金が入った者に関しては、本当に厳しい審査が行われている。インターネットの場合は、それが全くできない。それだけでなく、24時間アクセス可能である。そこに、インターネットにおける問題があるわけである。

(7) インターネット・ギャンブルの拡大とギャンブル依存症

現在、アメリカでは約133万人がギャンブルで破産状態になっている。これを負債額

にしてみると400億ドル、ただし、この数値は、FBIが編集したビデオの中の1998年4月7日のABCナイトラインで報道されていたものである。その番組では、インターネットサイトの模擬カジノが140といわれていたのだが、それが今では1000以上にのぼっていると言われる。

3年のうちに140から1000以上になっている。2000年には100億ドルのビジネスになるだろうと言われていたが、それが今や800億ドル以上のビジネスになっているわけである。

一番危険なのは、このABCのニュースでも言われていたセーフティ・ファクターがないということで、それから公平さについても全くわからない。公平さに関しては、通常のカジノではきちんと担保されており、例えば、絶対にサイコロに細工をしないとといった基本段階での公平さというのはきちんと担保されている一方、インターネット上のカジノではオッズに関しても、サイトを開いているところがいくらかでも操作できるようになっている。何も知らずにスロット・マシンをやるにしても、本当にそれが公平に出るかという保証は全くないわけで、それを調べる手段もないということになる。

もう一つの考え方としては、合法化している国、例えば、アンティガ等との兼ね合いが難しいのは、結局、フリー・トレード・ゾーン等をつくって、国の経済をどうにかして活発化させようとしているわけで、そのために、アトランティック・シティやミシシッピがカジノを作って州の経済を活性化させようとしているのと同じことをインターネットに関してしているに過ぎないのである。

インターネットのギャンブルの怖さというのは、ラスベガス型カジノをつくって大勢の人を呼ぼうとしていたのが、ワールドワイドで可能となることであり、経済の発展途上国には大変魅力的であるということである。

(8) インターネット・ギャンブルとラスベガス型ギャンブルの相克

今回の調査項目第5番目に関するもので、全体的に言えることは、例えば、ラスベガスでは、カジノというのはラスベガス全体の10%か20%くらいの比重に過ぎず、あとはエンターテインメントというか、街全体がレジャーランド化していて、それを通して羞恥心とか、後ろめたさといった、ギャンブルにあるコンプレックスみたいなものがなくなり、女性や子供も行くような健全なムードで、一流のエンターテイナーによるパフォーマンスがあり、カジノに行くのが主目的ではあっても、時間的配分でいくとエンターテインメントに割く時間、家族とともに過ごす時間が圧倒的に長く、ほとんどの時間は結果的に健全娯楽であったという印象を持たせる雰囲気になっているのである。そういうラスベガスのカジノ全体の雰囲気をグランドデザインするプロデューサーがいて、カジノ同士の共存共栄を企画しているようで、その意味でもネバダに限って言えばインターネット・ギャンブルによる影響はあまりないと言ってよいように思われた。しかし、FBIで聞いた結論というのは、小さな国の小さな島で、パソコン1台あれば大金持ちになれる可能性もあるので、

ミシシッピーとか、アトランティック・シティのような、ある意味ではカジノ経営に行き詰まっているところでは、ラスベガスの成功が大きな刺激となりつつも、やはりカジノを大型化させてどんどん発展させていくにはどうしたらいいのかという方向を模索しているということである。こうした発展途上のカジノを持っている州にとっては、インターネット・ギャンブルというのは、ものすごく大きな競争相手になるかもしれないが、ラスベガスのように大きな揺るぎないものをつくってしまえば、インターネット・ギャンブルというのも、それほど大きな痛手にはならないということである。

そういう意味でいえば、特にマイノリティの人達は、カジノを経営する特権を与えられていたのだけれども、そういった人にとっては、インターネット・ギャンブルというのは非常に驚異になっていくものと思われる。

インターネット・ギャンブルがそういう意味からも全米のカジノ経営にとっては大変問題であろうということは、FBIでも報告を出しているとおりで、ネバダでインターネット・ギャンブルのことを質問したとき、それに対して法律を早急に整備する必要があることを強調していた。このインターネット・ギャンブルは現行法のワイヤー・アクトにひっかかり、違法との考え方もあるが、それは拡大解釈との指摘もあるので、法改正をしてインターネット・ギャンブルは違法であると規定すべきであるということをやっていた。

また、非合法の問題として必ず出てくるのが、行為者個人に関しての情報が全く得られないということであり、例えば、未成年者なのかどうか、ギャンブル許容年齢に達していないか等の情報を得ることはほとんど不可能ということである。

(9) インターネット・ギャンブルに対する法的コントロールの必要性

ネバダではカジノ・コミッションがライセンスを与えるために、ものすごく厳しいチェックをしているけれども、インターネット・ギャンブルの場合には結局そういったチェックというのが、全く入れようがない。

ゲーミング・コントロール・ボードの役割は、まさにこの点にある。

もう一つは、ライセンスをとっている人達だけではなくて、賭けに来る人達のチェックも非常に厳しくやっており、特にネバダでは賭け金がどこからきたのか、マネー・ロンダリングに使われているのではないかとかといった点等について厳しくチェックしている。

しかし、インターネット・ギャンブルの場合は、世界が相手であるから、どこからきたのかということも全くわからないということで、いくらレギュレーションをつくっても、すぐに簡単にバイパスができしまうということである。

また、ラスベガスのカジノでは、監視カメラで、監視をされていないというふうに思わせるようにしてある。

ネバダ委員会によれば、必ず私服警察がまわっているということであり、特にボード・ゲームをやっている場合は、何重かの構造になって監視がついている。ディーラーの後ろ、その後ろ、そのまた後ろという形になっている。

各カジノの場にはサーベイランスといって、監視の部屋というのがあり、各ホテルがインターネット上にこれはまずいと思う人達を載せて、お互いに情報交換ができるようになってきている。インターネットを開くと、どうしてもカジノへ入れてはいけない人達のリスト、いわゆるブラックリストも見ることができるようになってきている。また、興味深かったのは、係員が収益金を数える場所で、コインのカウンターもあるし、お札を数える部屋もあるわけだが、そこでは係員の犯罪を防止するために必ず洋服をポケットなしのものに着替えて、しかも札を数えるためには透明な机が用意してある。それをまた、カウンターにかけてという形で職員が収益金の一部を窃取しないような方策がとられている。

(10) 法律による合法化と規制の葛藤

インターネット・ギャンブルの問題は単なる法律の問題ではなくて、インターネット社会の現象としてトータルに考えていく必要があるだろう。ただし、ネバダ側が言うには、そのうち合法化されるのではないだろうか。つまり、インターネット・ギャンブルというのは、もうすでに行われてしまっているし、必ずこれは合法化していくしかないだろうという見解が表明されていた。

つまり、合法化していくことで、合法化基準を明確に規定して、それに違反したものを規制していくという方向にいくだろうということである。

規制をどうやって行うかについては、二つのハードルがある。一つは、実際に法律をつくっても、それをどうやって運営していくかという問題、もう一つは税金の問題である。

当然、州がカジノを主催すれば、それに税金が掛かってくるわけだが、非合法の賭博の一番の旨みというのは、それが無税であるということであり、どうやって税金の徴収というものを考えていくかということになる。

ネバダ州で、インターネット・ギャンブルのインパクトはどうなるのかという質問をボビー氏にしたところ、それに対しては、テクノロジーで考えたら、これは両刃の剣になる。つまり、インターネットをうまく使うことによって、やはりプロパティにその場でなくてはいけなと呼び込むことができるか、あるいは家にいた方がよいと思わせるのか、それともやはり此方に来てくださいということに使えるのか、インターネットというのは、一つのテクノロジーだから、人々を此方に来てくださいというふうに見ていくことはできる。

インターネットというテクノロジーを使うことによって、実はネバダもものすごく利益を得ることができると言われている。それはどういうことかということ、人々の金の使い方というものを、ある程度インターネットに呼び込ませて、その管理ができ、それぞれの顧客の管理にも使えるわけで、それを通して、もっと客を呼び込むような戦略に使っていくこともできるわけで、インターネットとタイアップさせていくような方法、それを考えればいいということで、ネバダ州の方では、合法化に積極的であるように思われた。